



Title	旧ヤップ公学校卒業生の日本語談話能力：訂正過程 についての一考察
Author(s)	由井，紀久子
Citation	阪大日本語研究. 1996, 8, p. 73-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8791
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

旧ヤップ公学校卒業生の日本語談話能力¹⁾

——訂正過程についての一考察——

Yapese Communicative Competence in Japanese:
An Analysis of the Correction Process

由 井 紀久子

Yui Kikuko

キーワード：南洋群島，ヤップ，談話能力，訂正，公学校

0 はじめに

太平洋の赤道に近いミクロネシア地域は戦前日本が委任統治を行ない、公学校を設置し、日本語で初等教育を行っていた。ミクロネシアの老人は戦前に日本語を習得し、今なお使用能力を維持している。小稿はミクロネシア連邦ヤップ州の日本語話者の談話能力、中でも訂正過程におけるストラテジーをケーススタディ的に明らかにすることを目的としている。

外国語あるいは第2言語を話しているとき、言いたいことを表すことばが見つからず会話がとぎれそうになることがよくある。話し手は何とかことばを選び出し会話をつなぎ、話を続けていく。この行為は「会話」行動の観点に立てば、会話の中断を修復し、会話を続行させようとする行動である。この行動はたしかに母語話者どうしの場面でも起こりうるが、その場合はすでに有している語彙のうち、忘れた単語を自ら思い出すか、聞き手の助けを借りて思い出すのが多いと思われる。しかし、接触場面（ウェストプニー 1995）で起こった場合、思い出そうにも該当する表現自体を知らず、思い出しようがない場合も含まれるのが特徴的であり、解決のために採られているいくつかのストラテジーが認められる。接触場面で会話がよどむ、すなわちコミュニケーション障害が起こる原因の一つともなる

このような「訂正の過程」を考察し、どのように非母語話者がモニターにひっかかった問題を解決していくかを記述することも小稿の目的の一つである。

論述に先立ち、小稿で扱う「訂正」の定義をまず、明らかにしておきたい。Neustupný (1985) は談話能力には生成と訂正の2つの相があるとしており、「言語問題」を解決するための訂正の規則の集合の存在について論じている。そこでは訂正過程を逸脱の認知から訂正調整へといたる過程としている。小稿で扱う訂正もこれに準じ会話中にモニターに引っ掛かるflag提示の段階をへて、話者が語彙を選びだすのを意識的にこなうこととする。そしてモニターに引っ掛かってから問題を解決し、もとの会話に修復するまでの過程を「訂正過程」と呼ぶことにする。

1 データ

小稿で用いるデータは1994年度にミクロネシア連邦ヤップ州で採集した日本語談話資料である。まず、データの背景となる戦前の当地での日本語教育とインフォーマントの日本語について述べておく。

1.1 ヤップ公学校における戦前の日本語教育とヤップ州での日本語

日本は1914年にドイツより南洋群島を占領して以来、徐々に島の子どものための公学校を設置し、1945年まで5年課程の初等教育を行なった。ヤップにはニフ、マキ、ヤップの3校に3年課程の本科がおかれ、全児童が対象であった。3年課程を終わった段階で選抜を行ない、成績優秀者のみが中心部コロニーにあるヤップ公学校の2年課程補習科に進学した。公学校は「国語」を中心にしたカリキュラムが組まれ、ヤップでは日本人訓導が教えた内容をヤップ人の補助教員がヤップ語に訳すという形態の授業であった。補習科では日本語使用が強調されたが、インフォーマントたちの内省では在学中は単語を発ったり教科書を何とか読むことはできても、伝達行為を行なうには至っていなかったという。補習科卒業後は、パラオの木工徒弟養成所に数人進学するが、ほとんどの者は隣鉱採取現場や飛行

場建設現場，農業試験場，民間会社などにおいて日本人の上司のもとで仕事に従事しており，仕事場で上司と，あるいは他の島の人々との共通語として日本語を使用していた。ヤップ公学校卒業生の多くは仕事の場で日本語使用能力を習得したようである。仕事を通じては第2言語として日本語を使用していたことになる。敗戦とともに日本人はヤップから引き揚げたが，その後日本人がいた地位にアメリカ人が就き，慰霊団や調査隊などの日本人が訪れ会話を交わすことはあるが，彼等の日本語に新たな影響を及ぼしている例はまれであり，彼等の日本語はほぼ完全に化石化している可能性が高い。本資料は非日本語母語話者による化石化した日本語資料として価値があると思われる。

1.2 インフォーマント

今回の分析に用いたデータは1994年夏に行なった延べ30人分の調査資料のうち，次の3人と筆者（J1）および共同調査者の崎山理国立民族学博物館教授（J2）との談話資料である。3人へのインタビュー調査は本人の居住宅にて行なった。以下，調査時の年齢，居住地，卒業校，卒業後敗戦時までの仕事，戦後の日本語との関わりの順で示す。

- Y1：67歳／最南端 GILIMAN／ニフ公学校本科，ヤップ公学校補習科卒／飛行場建設に従事／ふりがなつき聖書を日本語で読み続けている，数年前にラジオのアンテナを張り日本語放送をキャッチしている，パラオ人の友人にカタカナ日本語で手紙を時々だす
- Y2：67歳／中東部 TAMIL／マキ公学校本科，ヤップ公学校補習科卒／飛行場建設に従事／偶に来る日本人観光客とことばを交わす
- Y3：66歳／離島 ULITHI および中心街近郊 MADRIDGE／マキ公学校本科，ヤップ公学校補習科卒／南拓でのボーイ，飛行場建設に従事／筆者らと約50年ぶりに日本語を使う

2 訂正過程の記述

さて、本節では前節で述べた資料から、語彙不足が原因と考えられる訂正過程にしばり、記述していきたい。

2.1 訂正過程の開始段階

訂正過程がはじまったときにはモニターへの引っ掛かりを示す flag の特徴が現れる。例えば、(1)の「あ」や(2)の「あの」、あるいは考える間が現れることによって訂正過程が始まったことが分かる。これらはモニターへの引っ掛かりによって訂正の必要を意識化している段階である。

(1) Y3 : …とうとうその自分の奥さんが死ん、でしまいました。

J2 : そうですか。ここで。

Y3 : ええ、このヤップで。でそのあとマキ、学、公学校帰ったらもうそのあとともおこりん坊で、もうひどい目にあ、あれ、わたしたちのときはぞうりで、(打つしぐさ)

(1994/07/29 Y3)

(2) スペイン時代が、鉄砲が来た。その山にたくさんきろーい草があったんでしょ。あれは大砲のために、その、ヤップへ来た。箱の中から、あの、あの、大砲を、よその、スパニッシュの草、そして、みんな、あの、箱の中入れて、動かないようにこわらないように、そしてここで開けてその草がもう、みーんなヤップの、山にあった。昔はその草はない。

(1994/08/15 Y2)

2.2 訂正過程の中段階

上のような特徴で訂正の必要を意識した非母語話者は次に以下のような事中訂正（ネウストプニー前掲書）を始める言語行動を行なう。

(3) a. 発話停滞

b. 発語中断

c. 当面発語のキャンセル

(3a)は例えば、(1)における「あれ」のように言いよどむ場合である。(3b)は(5)の「採取された」と言うべきところを「さいしゅ」の途中で止めるような場合である。また、(3c)は(4)のように「食べる」と言ってから「食べるんじゃないんだよ」と前の発語をキャンセルしたり、「すう」と言いたかったところをいったん「すわる」と取り敢えず言って言い直してみるような場合である。(3a)(3b)(3c)のいずれを選ぶかは後述する学習者のタイプとも関係がある。すなわち、モニター監視が強すぎ、間違いを口にくいタイプから、話の流れを止めずに話し続けようとするタイプまで、訂正過程のこの段階で学習者のタイプが現れる。

(4) J1: ビンロウジュ (註: 嗜好品の BETEL NUT) って堅いで
すか。

Y: うんちょっと堅いね、(だ) から歯の痛い人には食べられないね。

J1: ああ

Y: 食べるんじゃないんだよ。あのすわる、あの噛んで捨てるんだから。

J1: 捨てる、え、でもみんな捨てるの見てたら、もうあのつば
だけ、²⁾

Y: うん、あのジュースね、あるやつは、このビンロウジュのま
までは飲むんだけど、うん、で、タバコなら、う、いやだよ。

J1: ああ、

Y: あるやつは、ある人は食べるんだ、

J1: ええ

Y: 飲むんだからね、タバコより、うん

J1: (笑い)

- (5) …この、(註：自分でかいた地図をさしながら) ここはね、ヤップはね、ヤップ島、ヤップはここです、ここでしょ。そしてこれ、ここが、さいしゅ、ここは鱒鮎が採れた。あの、ドイツの人が、と日本。… (1994/08/15 Y2)

2.3 訂正過程の終結段階

flag が現れ、事中訂正を始めると、次に解決・終結の方向へ話者は持っていくとする。解決のストラテジーについては下のように分類できる。

- (6) a. 単語再浮上
b. 類義表現による代用
c. 説明的表現による代用
d. 文脈依存の語による代替
e. 相手への説明要求 (Ozaki 1989)
f. 非言語手段選択
g. 放棄

(6a)は本来欲しかった表現が戻り、スムーズに解決にいたる場合である。(7)では取り敢えず「ガバメント」と英語で代用し、その後「政府」という語を取り戻している。(8)は「非常時」に無事たどり着いている。コミュニケーション継続上の問題は小さいと思われる。

- (7) J2: 便利な世の中になったもんだ (笑い)、昔はね
Y: なかったんだから
J2: たいへんだった
Y: 世の中今変ってんですからね
J2: ほんと、日本時代、電話もちろんありましたでしょ
Y: いや、あの、ガバメントだけ、政府だけ。
J2: 村にはなかった

Y : 村にはなんにもなかった。今、パラオはもうよくなってんだよ。

(8) J 2 : あちらに8月のいつだったかな、行くなっていった。病院

Y : そうです。そう言って、レモンもって、私、あの、レモン、注文したんですからね。

J 1 : 7日？

Y : パラオ持って行くのに。

J 2 : ああそう、レモン持って

Y : レモン持って行ってもら、パラオの人レモンないんだよ。

J 2 : ビンロウジュもないよ。

Y : おお？そうですか。パラオに？

J 2 : パラオ

Y : 今、もう、何て言うかな、あれ、あの、非常時だな、パラオのビンロウジュは (笑い)

(6b)は当該の表現にいたらなくても、類義表現で代用する場合である。これは(6d)に比べ、類義性が認められる場合で、視点の変更などによる入れ替えの許容範囲内である場合である。上の例では(9)(10)の「宗派に分かれて」の代わりに「ある教会で分けて」とするような場合である。

(9) あの石貨はうちの石貨だよ。ぼくはユニフ (註：村の名) のこれ (註：親指を立てて長を示す) だから、みんな知ってんだよ、わたしの名前。ぼくはユニフの、一般の人はぼくの、ぼくが上だよ。だから、あの、大きい石貨、石貨あるだろ、…

(1994/08/18 Y 1)

(10) J 1 : ヤップはモルモンの人たくさんいるんですか。

Y : あんまり、たくさんじゃないですよ。みんな、あの、ある教会で分けてるんですからね、あの、モルモン教会と、それからあのジェホバね、それからあの何て言うかな日本で、あの

PROTESTANT,

J 1 : プロテスタント

Y : ああプロテスタントね、それからカトリック

(1994/08/01 Y 1)

(6c)は(2)の「緩衝材」を説明的に言ったり、(4)で「汁だけ吸う」を「囓んで捨てる」複合語化して言うことであり、複合語化して説明的に言うのはピジン化言語の特徴の一つかもしれない。限られた語彙を用いて表現する場合、該当する単語が使用語彙に無く、採用される手段である。

(6d)「文脈依存の語による代替」は次のような例に現れる。

(11) (石貨と老人が写っている古い写真を見ながら)

Y: これはウルルの人じゃないかな。

J 1 : ああ,

Y: この、なんだ、あの、話ありますか、この写真の話。

J 1 : はね、これだけなんです。これはね、これは石貨の話だけ

Y: ああそう

J 1 : で大きいものが人間の背よりも高いとか

Y : ああそうだね

(1994/08/01 Y 1)

(11)では「説明文」を言いたかったが、該当する語がでてこないで「ことば」に関係のある「話」で代用している。この場合、「話」の外延を非母語話者が増やしているが、これも語彙数が少ないピジン化言語の特徴の1つと考えられよう。また、本調査中、「話」を「言語」の意味に使っている例も見られた。

(12) J 2 : シグロールはグロール (註: 地名)

Y: ウルルと一緒にです。話は、同じですから。いや、あの、ウギルの離島は違うんだ。ウギルはヤップの話と違うんだよ。ちょっ

と、あの、サイパンにちょっと似ているね。話が。

J 2 : ユルシー?

Y : うん。ユルシー。

(1994/08/01 Y 1)

このようにある語の外延を増やし、事実上多義化させることを「シンボル化」と呼ぶことにする。ここでの「シンボル」は本来の意味に加えて非本来的な意味を担わせると言う意味合いで用いている。ここでは「話」を「ことば」のシンボルとして使用しているのである。ピジン化した言語では限られた語彙数で運用するため、シンボル化がおりやすいと言えよう。

(6e)「相手への説明要求」は Ozaki (1989) で詳しく分析されているが、本資料では(10)の「何て言うかな日本で、あの PROTESTANT」のような例で現れた。但し、尋ね方にも2通り考えられる。すなわち、ここで英語を使うように第3の言語で尋ねる場合と、先述の説明的表現を使って説明要求する場合とが考えられる。(6f)「非言語手段による伝達」は(1)で「殴る・打つ」が分からず、打つジェスチャーで代用する場合である。代用語と言うことも可能だが、後述する言語運用能力との兼ね合いから、別々に分類した。最後の(6g)「放棄」は(1)で「ひどいめに遭わされた」の後半を言語化せずに放棄し、次の発話へと続けていくストラテジーである。

3 考 察

上で述べてきた訂正過程のストラテジーをもとに言語習得との関係から考察を加えてみたい。まず、学習者のタイプとの関係、次に談話運用能力との関係について考えてみる。

3.1 学習者のタイプとの関係

2.3節の中段階のところでも少し触れたが、上のどのパターンを取るかによって学習者のタイプを識別できると考えられる。開始段階での flag はタイプの別が現れないが、中段階ではモニターに掛かった後、言

いよどむか、あるいは取り敢えず何か言ってみるかとはモニターの働きの強さとも関係があるかもしれない。モニターが強く働きすぎると言いよどみがおこり、終結段階にいたらず失敗に終わってしまい、コミュニケーションの流れが途絶える最悪の道筋をふむことになる。一方、中段階で当面発語のキャンセルのストラテジーを取る人は終結段階で(6e)相手への説明要求も取り、よくしゃべる人という印象を与える。

3.2 言語習得段階との関係

訂正に問題が起こったときに会話をつなぐために、上のようなストラテジーが取られていたが、言語習得段階との関係で捉えると終結段階のストラテジーと言語習得段階に相関関係があると思われる。(6a)「再浮上」はもともとの語彙数や運用能力との関連が薄いと思われるが、(6b)「類義表現」のためには語彙に広がりがないとならない。語彙に限界があると(6c)の「説明的表現」ストラテジーが選ばれやすくなり、さらに(6d)でみたように「シンボル化」して語を用いることになる。(6e)は必ずしも語彙が少ないことを意味しない。比較的十分にある人の方がこの手段を取る場合が多いものである。また、(6f)「非言語手段」のも語彙数が少ない場合もあるが、(6e)同様、臨時手段として用いられることもある。本稿ではケーススタディ的に分析を行なっているので早急な一般化はできないが、終結段階のパターンと習得段階にはある程度の相関関係があるのではないかと推察される。

次に、非日本語母語話者が訂正にあたり、母語話者の発話を手本として用いる能力について見てみたい。つまり、自分の語彙にない新しい語が出てきたときに気を付けてそれを自分の使用語彙に取り入れる能力についてである。しかし、今回の資料には日本語が化石化していると思われる話者の資料なので母語話者からの語彙の取り入れは次の例のように見られなかった。

- (13) (全身いれずみを施したヤップ人の古い写真を見、インフォーマ

ントの腕のいれずみも話題にいれながら)

J 1 : これ

Y : いれずみだな

J 1 : ええ

Y : いれずみ

J 1 : これ彫る時痛かったですか

Y : おお、いやこっちはあんまりそう痛いじゃない、こっちは痛いだろうと思う。これはちょっと痛いんだけど、これよりまたすごいだろうと思ってる、ね、これは、からだ全部、うつんだから

J 1 : そうですねえ

Y : はあはあ。うん。しかしね、ヤッ、こういういれずみの人は名高いです。有名な人ですね。

J 1 : ええ、たくさん、あの、いれずみがある人、

Y : はい。

J 2 : むかしの人ですね。

Y : はい、今でも、あすこほとんどやってないんだから、もう。も、どこもないし、やる人も知らないんだからね。これは、あの、やるときはやっぱり、かたちかいてからう、うつだろうと思ってる (1994/08/01 Y 1)

この例では「いれずみを彫る」という定型的表現が母語話者から提示されているにもかかわらず、針を突き刺すことから「うつ」や動作一般を表せる「やる」をあくまでも使用し続けている。語彙体系が化石化を起こすと新しい語彙の取り入れは行なわれにくくなると考えられる。

4 むすび

以上、ミクロネシア連邦ヤップ州での調査資料より、ヤップ公学校卒業生の訂正過程における日本語談話能力について見てきた。その結果、イン

フォーマントの訂正過程として終結段階に次の7つのストラテジーが認められた。

(14) 単語再浮上

類義表現による代用

説明的表現による代用

文脈依存の語による代替

相手への説明要求

非言語手段選択

放棄

これにより、訂正過程に採られる言語行動がより詳しく明らかになったと思う。また、インフォーマントたちが談話を修復するため取るストラテジーと言語習得段階には相関関係があるのではないかと示唆された。語彙数の限界を克服しながら会話を続けるにはシンボル化や説明的表現を用いる傾向が強いと推察された。また、このデータの日本語は化石化が進んでいることが母語話者からの語彙の取り入れが見られないことなどにより示された。

注

- 1) 本稿は文部省科学研究補助金により1994年度から行なっている「旧統治領南洋群島に残存する日本語日本文化の調査研究」(課題番号06041070)の成果の一部である。
- 2) ヤップでの最近のビンロウジュの喫し方はビンウジュの実を割り、石灰の粉をかけ、タバコを少し千切って加え、キンマの葉で包み、嘔む。タバコを加えなければ、汁を飲み込むこともするが、タバコを加えている場合は、汁を吐き捨てながら嘔む。

参考文献

南洋群島教育会編(1938(1982復刻))『南洋群島教育史』青史社

- ネウストプニー, J. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- Neustupný, J. V. (1985) *Post-Structural Approaches to Language*. University of Tokyo Press.
- Ozaki, A. (1989) *Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non-Japanese*. Pacific Linguistics Series B-No. 102. The Australian National University.
- 崎山 理 (1995) 「ミクロネシア・ペラウのビジン化日本語」『思想の科学』3月号
- 渋谷勝己 (1995) 「多くの借用語と高い日本語能力を保ち続ける人々」『月刊日本語』2月号

(大阪大学文学部日本語学, 応用日本語学)